

— 新型爆弾の脅威を知っていた父 —
昨年一月二三日の広島教会創立一二〇周年記念礼拝に出席でき、私の家族と交わりを持っていた多くの教会員の方々や、わざわざ遠路出席された旧知の方々にも会うことが出来本当に嬉しく思った。その時記念誌として「あの日・あの時」を戴いた。最初に父が何を書き、母が何を書いていたかが気になりペーシを捲った。父の原稿は無く母の「四十二度目の原爆忌を向かえて」という原稿を見つけた。それは当然なことで、広島教会が一九八四年に『シヤローム』という教会報（月報）を発行してから初めて教会員が原爆について重い口を開いたとあり、私の父は一九八四年に病の床に臥し一九八五年二月に昇天しているのだから、子供が皆幼かったため疎開して居て皆傷一つ受けずに守られた事で、思い出を書き資格はありません」と書いてるように、父も真実をそのまま書くことは躊躇ったのではないかと感じられた。東京に帰り一月二三日の愛餐会の後、原爆資料館を訪ねたことや、私が原爆直後のこと知っている事実を桜井牧師に電話したところ、その事を『シヤローム』に書いて欲しいと言われ、この原稿を書き始めた。

私の家族は昭和一六年父が広島高等師範の教授に招かれ、その年の夏に広島への地に移り原爆投下までは早稲田区牛田に住んでいた。私と姉芳野は一九四五年の四月から比婆郡西条へ付属国民学校の生徒として集団疎開し、広島には母方の祖母きくと両親、二人の弟光伸・博之と妹通子が残っていた。私達が集団疎開に出発する少し前、父と二人で八木にいった父の知人（知り合いと言ってもほんの一寸した関係だった事を感じていた）のお宅にリヤカーを引いて荷物を預けに行っただ事を憶えている。その時、祖母だけでも早く連れてこられたらどうですかと言うような話だったので、祖母だけは早くから八木に行っていたかも知れない。しかし八木でも安心できず、北九州八幡の叔母の家に移った。私の家族は弟光伸の国民学校一年生の一学期が終わった七月の中ごろに八木から奥深い大畑に引越す計画をたてていたようだ。昭和二〇年八月六日の午後になると広島から負傷した父母や兄達が続々と比婆郡西条の疎開先のお寺に現われるようになり、訪ねてくる人くると人のほとんどが自分の住んでいる街に爆弾が落ちたと言っており、爆弾が落ちていない街がどこにあるのかという疑問が湧く状態だった。翌日になると新型（特殊）爆弾という言葉で、極めて恐ろしい事態が起こっている事が伝えられ始めた。何日が経っても何の連絡も無い仲間が増え、みんな不安になっていったが、私の家族は当然広島を離れていた筈だと思っただけで、死んでいる筈が無いと思っていた。そして生きていくという確信を持っていた。しかしその後、私達の家族が翌八月六日のさらなる奥地の大畑への引越しのため広島へ行き準備作業をし、八月五日の夕方四時半すぎに広島を離れた事を聞いて驚き、幸運を感謝した。また父は八月六日の引越しのため、八木から横川に出る国電（横川線）に乗ろうとして、一、二秒差で自動扉が閉まり乗り遅れ、母に学生達を待たせる事になるのではないかと責めていた事を弟から聞いた。もしその電車に乗っていれば横川駅に着く直前に黒焦げになっていた運命だった。父は翌日から学生の安否確認と、遺体片付け作業のため広島に毎日出ている。父の学生は幸運にも全員元気だった事を本部に報告に行ったところ「そんな報告はいらない」と言われたと聞いていた。その頃仲間の教官に遭うとお互いに「おまえも死にそこないか」と挨拶していたと父から聞かされた。焼け跡の惨状は語るべき言葉も無くすさまじいもので、私達子供達も何度か聞かされたが、母は直後の強烈な印象を聞かされては思ひ出を書く資格がないという母の複雑な気持ちが見えているように感じる。

— 何故私の家族が直前に広島を出たかについて、父は私達に直接にも語って呉れなかった。しかし原爆投下の直前に撒かれたピラに、近かじか特殊な新型爆弾を投下するから善良な国民は街からでるように書いてあったと言う話と、そのピラを憲兵隊が回収し「このような事を信じる国民は非国民だ」と警告していた事実があった。そのためそのピラを実際に見た市民は殆ど居なかったし、噂にもならなかった。しかし、父は海軍の気象観測の手伝いをやっていた関係で、おそらく実物を見たのではなからうか。何故なら広島原爆資料館が出来た時、父が私にピラを見て来るように言ったので、ピラを探し現実にその

ピラを見た記憶がある。それは筆書きの下手な字の日本語で、字の大きさも揃っていないもので如何にも急いで書かされた雰囲気を持ったもので、もちろん印刷されていた。おそらくアメリカの収容所に入れられた日系人の誰かが書かされたのではなからうか。そのピラの話は東京の友人にしたところわざわざ広島に行き調べてくれ、そのピラが見当たらない事や、そのような原爆投下を予告するピラは無いと書いてあるという事だったので、それを確かめるため今回原爆資料館を訪れた。まさに東京の友人の証言どおりであった。その友人を含め最近広島原爆資料館を訪ねた人達の感想は、本当の悲惨さ無惨さが薄れているとの感想で、観光スポット的になっていないかと言う意見だった。当時原爆と言う事を知っていた日本人はほとんど居なかった訳だし、資料館の説明プレートの文章も理解できない。父の「死にそこない」は何か後ろめたさを持ったもので、本当の徳劫によるものでは無かった。そのことを母は痛いほど感じ、直後に被災現場を訪れていて、原爆手帳を取れる資格があったのに生涯取らなかった。直後、母が焼けた牛田の家を訪れた時、形あるものはピラの骨組みと、グーテンベルクの印刷機で印刷された聖書の形だけで、その聖書を指で触ったところ崩れて灰となってしまったと語っていた。グーテンベルクの聖書は母方の祖父河合龜輔が日露戦争直後ロシアを訪ねた時古本屋で買求めた物で我が家の床の間に飾ってあり、私はよく開いて見ていた大きな本で、祖母の宝物だった。今でもその花文字のきれいだっただ事や、紙の手触りを覚えているし、私が見ている時いつも背後に祖母が立っていて、私がグーテンベルクなど書いたはずを書きたくないか監視していたのを覚えていた。もし八月六日に引越しをやらなければ庭に作った防空壕に埋めてあったわけを焼けてしまった筈であったが、原爆投下当日の引越し準備のため縁側に並べられていたために焼けてしまった。当時日本にそのような聖書があったことはどこにも記録が残っていないので、ここに書き記しておきたい。

いずれにしても母の「書く資格はありません」という言葉や父の「死にそこない」と言う言葉はかなり深い意味を持っているように息子の私には響いてくる。広島教会一二〇周年記念誌の「はじめに」に桜井重宣牧師が書かれているように、多くの被爆者が重い口を開けなかった事実が述べられているが、被爆の現実は口で述べる事が出来ないほどさまざまに、多くの人は何も喋らず墓場まで持っていく。しかし人間にとって身近な人の死や惨状のトラウマは意図的に治癒を図らなければならないもので、日本の社会はそのことを殆ど行っていないか。ある時間がたつて、例えば『シヤローム』に文を書く行為とか、人前で体験を話す行為などは治癒のプロセスにとって大切なことである。

広島教会一二〇周年の一週間前の土曜日に私達高校卒業五〇周年記念パーティが広島で開かれ、その時私が二〇〇一年九月二日のWTCテロの直後ニューヨークを訪ねた時の、生き残り（死にそこない）の人々のインタビュの話から、精神的トラウマのことを話したところ五八年ぶりに被爆の事実を語りだした同級生がいた。その話には、そこに居た仲間にとつて初めて聴く事実だったし、彼女は、これまで被爆の無残さを誰にも話したことは無かった。その時私の父の体験を話したところ、両親や兄弟に海軍関係者がいた人達は米軍が撤いたピラの事も特殊爆弾のことも聞いて知っていた。また疎開先で翌日ぐらいから新型特殊爆弾という言葉が語られ始めていた事実を見てもピラの件は本当だと確信している。

あの日あの時 追記 村上處直

二七一号に村上虚直兄がお書き下さいましたが、その後、弟さんからきいたということので次の文を送ってこられました。二七一号一頁の一二行目のあとに以下の文を付記して頂ければということでした。（編集委員）

弟光伸の話によると当日更なる奥地への引越しのため、大八車で五四号線の道路まで荷物を運び始めていた。そして二回目の荷物を運び出そうと両親が納屋から荷物を出そうとした時、光伸は大八車の取っ手を押さえ広島に背を向けていた時に閃光と共に背中が熱くなり、暫くすると「さうい音と共に爆風が来て開けていなくなった納屋の雨戸が吹き飛んだ。防空壕に入ろうとしたが力ボチャの蔓が塞いでいて入れず、その後七〇メートルぐらい離れた国道に出している荷物を見に行っている。その時広島島方面から臭い物体を積んだトラ

ックが何台も通りすぎ、暫らくすると白い火傷の薬を塗ったほとんどの裸状態の人達がどんどん歩いてくるのを見ていた。その中にお母さんが赤ちゃんを背負っていたが、死んでいて背中へはばりついているようになっていた。その「ぎのこ雲」や爆風、納屋の荷物を出して帰った。弟はその時国民学校一年生で、直後の「ぎのこ雲」を見て記憶している。もう本当は終戦も迎えさらに奥地に引越す必要はなかったかも知れなかったが、八木でお世話になってお宅のお嬢さんが広島女学校の生徒で、建物疎開のため広島に出、土橋で亡くなっており、気の毒で御世話になれなかったようだ。この事は父が姉と私を集団疎開先に迎えに来た時、聞いたような記憶がある。私たちが帰る当日だんだん雨が激しくなり、私達は帰れたが翌日帰ろうとした友人達は鉄橋や橋が落ち相当長い間疎開先に留まった。昭和二〇年九月（一七、一八日）の枕崎台風であった。この台風はすべてを押し流し広島放射能を含んだ表土もかなりきれいにしてくれた。八木から大畑に移ったのは八月の終わりのようだった。八木から大畑への引越時エンジンサイクロペチアブリタ二力の一冊を失い、父が大畑から馬車で山を下り懸命に探し野良仕事をやっていたが弟も話してくれた。疎開から帰る時だんだん雨が激しくなり、最後は父が引く車に乗せてもらい薄暗い山道をゆっくりゆっくり登ったことを覚えていて、体力のあまりない父がほとんど光のない谷筋の道を独りで車を引いた事は記憶にこびりついている。大畑で世話になった家は、馬車を引いている人の家で、馬に挨拶をして階段を上る馬小屋の二階の六畳で、そこが我々七人家族の生活空間だった。馬に挨拶を見ず知らずの人の家に身を寄せ、翌年の三月まで世話になり大畑小学校に通った。全く